

い。静かなる夜の雪折の音も冬の聲として數へたい。これは自然といへぬかも知れぬが、寒く凍れる夜のカラ／＼と地に響く下駄の音、さては火の用心の柏子木の音など、冬ならではかく迄深い感じを人に與へぬであらう。(完)

柑橘類

柑橘の類は晩秋より冬を通じて黄熟し、色に乏しい冬にあつては、一と際眼立つもので、色の調子を得ないと不調和になり易いのである。されど最も冬期の色彩に缺乏せる寒地にありて見る事能はず、これ等は暖地の産故、之に伴ふ他にも又必ず強き熱色のものがあるのであらうから、それ等ととり合はせたなら、面白い調和を得られると思ふ。

赤き實の美と小鳥

實として美なるものは、ツルモドキ、南天、ウメモドキ、ヤブカウジ、マンリヤウ、其他、これも多くは秋末に熟して、紅及び黄を呈し、花無き冬を飾るので、冬の花とも見るべく、畫とするには近くより見て描く可きものである。静物として寫生するには、その色とよく調和したるものを取り合はすのである。小鳥が木の實草の實と深き關係を有して居るのは、猶昆虫の花に於ける如くである。これ等は實地を觀察してその何鳥なるかを注意して描くがよい。ツルモドキ茨の實にハヒタ、キ及びツグミ等が、實を求食るために集まるのであるから、決してス、メや鶯などを描いてはならぬ。

(丸山晚霞氏『女性と趣味』の一節)